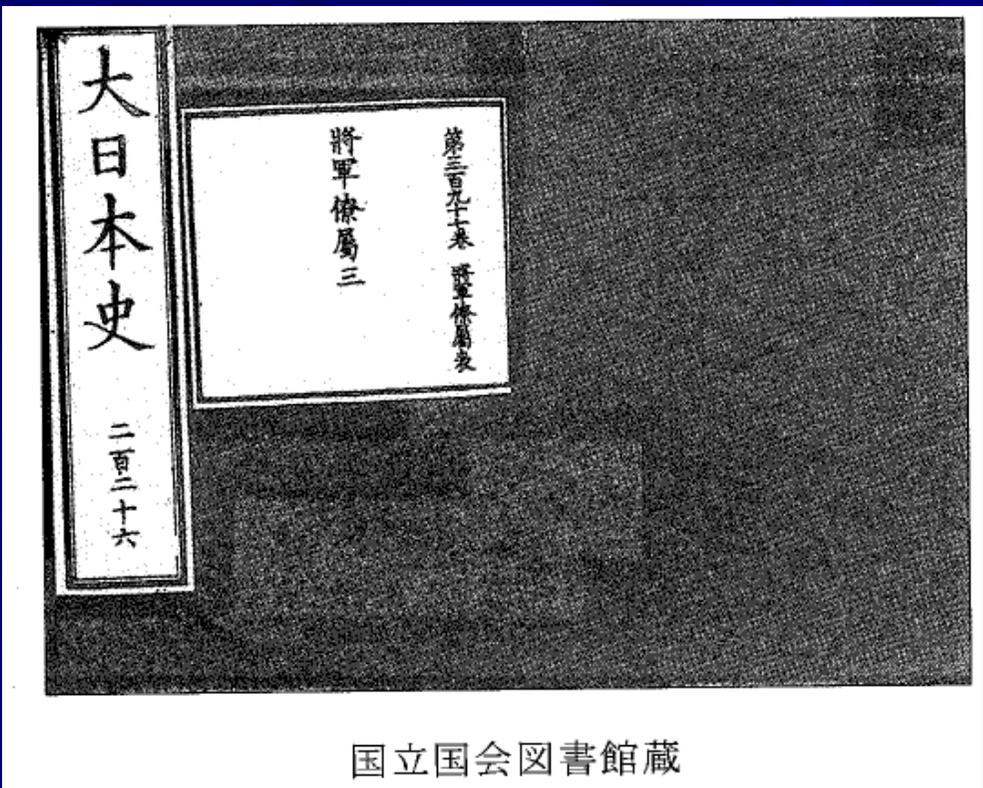


③立原翠軒との出会い四十歳



天明五年（一七八五）立原萬（翠軒）に出会い、「参考源平盛衰記」の校訂を行う。ここから大日本史編纂に関わることになる



茨城県立歴史博物館／水戸市史より

立原翠軒

一七四四〜一八二三

水戸藩士。学者として五代藩主徳川宗翰、六代治保の二代にわたって仕える。通称は甚五郎。致仕後に翠軒



藩内学者の反対を押し切って保己一を推薦

初め萬大人の名をきく、こゝにいたりて名と術のかなへるをしり、日本史の校合をゆだぬるの意を起す。然れども同僚のうけざらんことをはかりて、まづ参考盛衰紀を校正するにことづけて、大人を文公にすゝむ。其をりに萬の同僚みないさめていひけらく、国史はわが先君の修むる所なむ、瞽（く）者をしてその事にあづからしむ、これ吾等の恥にはあらずや、むべそのことをとゞむべしと。

萬うけずしていふやう、その人の盲たるは病なり、尊卑のいたす所にあらず、しかれども常にいはゆる盲人は、世のもてあそびぐさとなることを勤とす、この故にいやしまれざることかたし、塙は文学を業とし、人多く師の礼をいたして来り学ぶ、その説もまた取べきが多し、さらばいかでか明不明のへだてあるべきや、もし国史の校正にあづかりて補ふ処なくば、萬その罪をかふむりなんといらへしかば、終にそのとなかりにけり。

水戸藩から、紀州藩、尾張藩へと
徳川家へ出入りが始まる



実力を認められる

立原道造

1914～1939



軽井沢高原文庫詩碑

2008/3/13

117

四六歳・座中取締役と松平定信

寛政三年（一七九二）

老中松平定信から「座中取締役」（盲人仲間
当道取締役）に藤植検校と共に命じられる。

取締の役割は、

職十老など座の支配役にある者への助言

座法乗り改正

不正を行った者の吟味

座員の風紀取り締まり

座の者、鍼治導引音曲等の本業を第一に心掛
け、奢ることなく身分不相応なこと無きよう
座中取り締まりに心掛けることを兩名に申し
付ける。

当道では藤植検校は二八番目、塙保己一
は六五番目だった。

定信の『退閑雜記』に

「塙検校保己」は名高き盲人なりけり。和学をよくし、或令・式・ものがたりものなど講釈し、または類聚もの多く板行し、いまは水府へいで、日本史の校合にあづかる。寛政五年のころ、朝に願ひて和学校所とりたつべき旨にて、地所を下し給ひける。その学校の名を予に乞ふことしきりなり。故に**温故堂**とつけよと、人をもて云やりたり。」

（「塙保己」大田善磨）
と見える。

「**温故堂**ハ聖堂ヲ弘文院トイフト同シク公ケノ称ニハアラス公ニハ**和学**講談所ト号セシナリ」 （「和学講談所御用留」 壺 識語）



温故学会に残し伝えられている

筆は 水戸文公(治保・はるもり)

彫刻は 屋代弘賢

裏に『寛政六年甲寅十二月 弘賢謹刻』

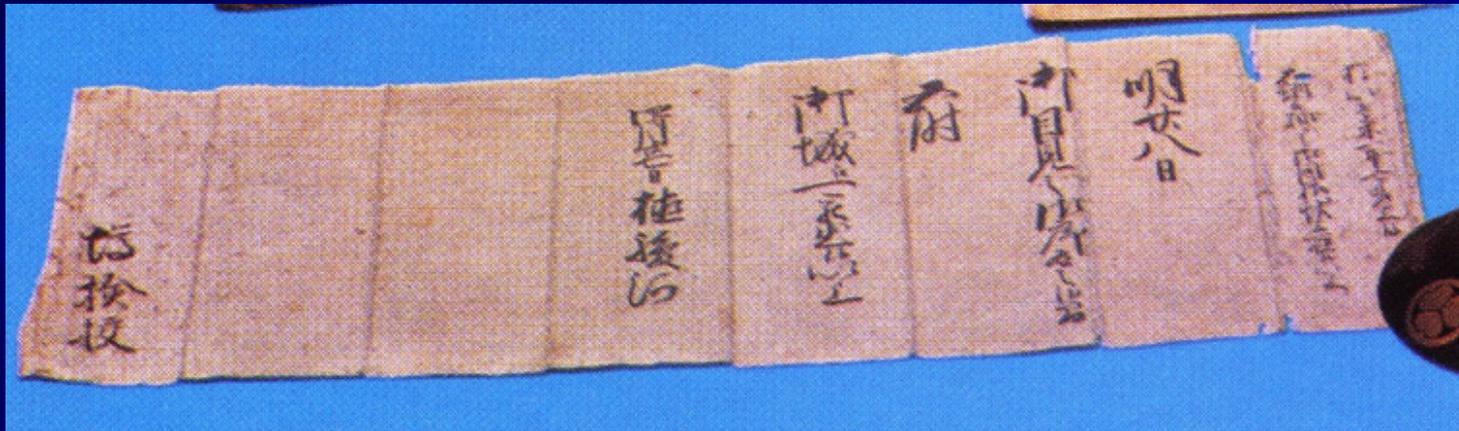
ちてちて眼明きハ不自由の者よ



温故学会 蔵

七〇歳・将軍お目見え

文化十二年（一八一五）



塙保己一記念館 蔵

和学者としての御目見

四月二十七日、

若年寄植村駿河守家長より二十八日將軍お目見えを
伝えられる。

四月二十八日、

十一代將軍家齊へのお目見え。

「総検校になってから御目見を仰付けられても、
それは総検校としてのものである。検校とし
ての御目見でなく、和学者としての御目見を
仰付けられたいというのが願である。そうす
れば和学を心掛ける人々の励みにもなるこ
とである。」

七月、

御目見医師の待遇とするむね通達を受ける。

七四歲・群書類従完成

文政二年（1819・74歳）

「群書類従」六百六六冊刊行完了。



七六歳・総検校

文政四年（一八二二）

二月・京都所司代松平和泉守乗寛から

総検校跡目相続の申し渡

五月、**将軍お目見え**、金二枚、時服二

領とを受ける。

八月十八日、上京すべきところ病に倒れ、
江戸に止まる。

八月二十三日、総検校辞職願。

九月十二日、**逝去**、

四谷西念寺横町**安楽寺**に葬る。
和学院殿心眼智光大居士





現在は
愛染院に墓地に



明治十九年 保木野へ分骨



「つながり」社会だった江戸時代

法政大学教授 田中優子

私はこの本を書きながら、「つながり」こそが、成熟したい社会を作る、もつとも大切なものではないだろうか、と何度も考えた。

江戸時代の障害者でもつとも有名なのは塙保己一である。「番町に過ぎたるものは二つあり、佐野の桜に塙検校」とうたわれ、当時から人々に尊敬され慕われていた。大学者でありながら、粹人が集まる狂歌連のメンバーでもあった。しかし、盲人でありながら学者になったことを、「個人の努力」としてだけ評価するのは、もつとくない。もつと大切なことが、「ここには秘められている。それが「つながり」なのだ。

まず当道座という大組織の存在だ。これは権力と経済力を持ち、盲人たちを子どもころから職業訓練し、職を配分する全国組織だった。そして驚くべきことに、その職業訓練は保己一の場合のように、定型から逸脱することもあった。保己一はいわば、按摩も鍼も音曲も一向にうまくならない当道座の「落ちこぼれ」だったのである。

その彼に熱心に耳から学問を教えたのは、当道座の師ではなく、むしろその周辺の健常者たちだった。

「二」には、当時の「読書」というものの特性も関係している。声を出して読むことは今よりずっと一般的だったので、わざわざ「ボランテニア」をする必要もなく、「一緒に読もう」と思っただけでもより声を少々高くすればいいだけなのである。健常者たちの多くも、耳学問で学んでいた時代だった。保己「はひとりで勉強したのではなく、多くの人たちと一緒に勉強したのである。」

しかし「二」には「ついで」以上のものもあつたはずだ。それは、だれかを助けられることの自然な喜びである。

駅の階段の上で「手を貸してください」と呼びかけて車いす運びを手伝ってもらった人たちの、照れくさそうで嬉しそうな顔が忘れられない。

これは「喜び」としか言いようのないものだ。保己「も、その喜びを周囲に与えていたのだと思う。」